

命を授かる選択肢

第15回岩手県がんフォーラム（岩手県、岩手県がん診療連携協議会、岩手日報社主催）は昨年12月15日、盛岡市のサンセール盛岡で「妊孕性温存療法」をテーマに開かれました。妊孕性温存とは、がんの手術や治療で妊娠するための能力（妊孕性）が損なわれる可能性が高い患者が、治療前に卵子や精子、胚（受精卵）、卵巣を温存しておく療法です。京野アトククリニック盛岡の熊谷仁院長が基調講演し、岩手医大附属病院の板持広明氏がセンター長を務めました。パネリストは、医師や胚培養士が本県の妊孕性温存療法の現状を伝え、ネットワーク構築の必要性を訴えました。

がん治療後に子どもをもつために「妊孕性温存」を考える

いま、全国的に妊孕性温存の質が注目され、改善のために、不妊治療の技術が活用されています。また不妊治療における生殖技術を利用しようという動きも出ています。広義では、婦人科、泌尿器科、外科などで行う、受精卵は凍結して96%の生存率で凍結保存し、凍結後の若年患者QOL（生活）も含まれますが、今は液体窒素の冷気にさらし

基調講演

不妊治療の技術活用

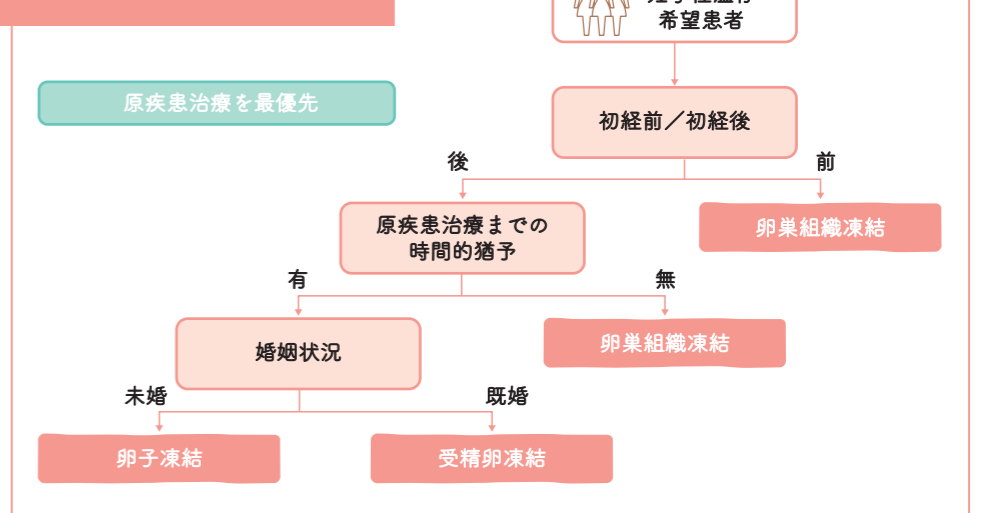
「妊孕性温存」に注目

講師 熊谷 仁氏（京野アトククリニック 院長）
座長 板持広明氏（岩手医大附属病院 がんセンター長）

凍結した卵子は、凍結後、以前から人工授精（AIH）でも使われています。精子の採取手術（TESE）でも妊娠や出産例は多数あり、これらは不妊治療で

授精による受精率は70%以上です。体外受精の顕微鏡下での受精率は約80%と推測されます。これは不妊症患者のデータなので、不妊症ではないがん患者の場合はもう少し上がるのではないかと考えられています。

女性の妊孕性温存



に付けてリスク分散しながら保管しています。卵巣凍結施設を各都道府県に設置するのは難しいと思いますので、集約的にHOPPEを活用することも一手です。いま本県では、卵子、受精卵、精子の凍結の相談カウンセリングは各医療機関で行い、治療は岩手医大と京野アトククリニック盛岡で行っています。卵巣凍結の例はまだなく、今後の案として、希望者はHOPPEの相談員とカウンセリングをし、県内の病院で摘出し、HOPPEへ移送するのが現実的だと考えます。

Q 凍結保存はどれくらいの期間可能ですか。凍結の維持費はいくらぐらいかかりますか。

A 小岩氏 胚の生存性については、液体窒素内で保存し続けられれば半永久的に可能です。保存期間は基本的に1年更新で、岩手医大では胚の凍結更新料は3万8500円です。凍結保存をしても、女性の生殖年齢を大きく上回ったり、万が一ご本人かパートナーが亡くなったりする場合は廃棄の対象になります。

Q 妊孕性温存療法の安全性が気になります。

A 尾上氏 最優先するのはご本人のがん治療です。卵巣組織の凍結については、卵巣に病気が残っている可能性を考えていかなければなりません。がんの種類によってリスクが高かったり、低かったりしますので、それぞれ専門の医師に相談しながら進めていくことが大切だと思います。

Q 卵巣などの機能を凍結保存した場合、がん治療後、どのタイミングで再移植するのでしょうか。

A 馬場氏 女性の場合ですが、がんが治癒した後、主治医の先生から妊娠許可が出てからになります。戻した卵巣が生着し、どれくらいの間、排卵し続けるかはまだわかっていません。妊娠したいタイミングで戻すことが一番ですが、生殖に適した年齢はありますので、あまり先延ばしにしないことも大切です。

可能性を残すことが大事 熊谷氏

熊谷 仁氏（京野アトククリニック 院長）
板持 広明氏（岩手医大附属病院 がんセンター長）

熊谷氏 凍結できる卵子の数は、患者さんの年齢によります。若ければ若いほど、卵子を確保しやすくなり、子どもをもてる可能性が高まります。がん治療を始める前ですと、チャンスは1週間がほとんどです。凍結しても必ず子どもを持てることも限りませんが、治療前に将来子どもを持てる可能性を残す、ということが大事なのだと思います。

妊孕性温存の方法

	卵子凍結	受精卵凍結	卵巣組織凍結
対象年齢	13歳以上42歳まで	16歳以上45歳まで	0歳以上37歳まで
婚姻状況	未婚・既婚	既婚	未婚・既婚
標準治療期間	2週間程度	2週間程度	2〜3日間
凍結方法	ガラス化法	ガラス化法	緩凍凍結法
融解後生存率	90%	95%以上	50〜80%
その後の治療	顕微授精(不妊治療)	体外受精(不妊治療)	自然妊娠 or 体外受精
出産例	多数	多数	約200例
課題点	卵子1個あたりの妊娠率は5-6%程度と考えられ、多くの卵子が必要	児獲得までにおおよそ3個の受精卵(胚盤胞)が必要	移植時のがん細胞の再移入 移植後の卵巣機能の生存率および期間(再移植が必要となるケースも)

出典：京野アトククリニック「がんでもママ/パパ 治療に臨む前に知ってほしいこと」

妊孕性温存療法 抗がん剤や放射線など、がん治療による不妊リスクを防ぐために開発された治療技術。主に、若年のがん患者が治療前に将来の妊娠・出産の可能性を考慮し、卵子や精子、受精卵、卵巣組織を凍結しておくことを指す。

県民からの質問コーナー

Q がん治療によって、男女ともに生殖機能が低下するのでしょうか。また妊孕性は妊娠に関わる臓器にできた「がん」だけが対象でしょうか。

A 小原氏 男女問わず生殖機能に影響が出る場合があります。手術、抗がん剤、放射線治療ががんの三大治療ですが、それぞれで妊孕性を損なう可能性があります。妊娠に関わる臓器だけでなく、それ以外の臓器のがん治療によっても生殖機能が低下することもあります。

Q がん治療中でも温存療法は間に合いますか。妊孕性やがん治療後の見直しなどは、主治医から説明してもらえるのですか。

A 伊藤氏 治療の程度や期間にもよります。病気の状態や治療の内容を総合的に考えた上で、温存療法ができるかをがんの主治医に相談するのが一番です。

Q 子どもがまだ幼い場合は保護者が温存療法をするか決められるのですか。

A 馬場氏 経済的負担もあり、子どもの場合は、ほとんどは保護者が決めることとなります。卵巣凍結などのリスクも含め、保護者の方にはしっかりと考えを持った上で決断していただきたいと思っています。

事前に県民から岩手日報社に寄せられた質問にパネリストの皆さんが答えました。

Q 県内ではどの病院・機関で妊孕性温存療法が受けられますか。すでに始めている方はいますか。

A 熊谷氏 卵子、精子、受精卵の凍結は体外受精ができる機関であればどこでも受けられます。県内は岩手医大と京野アトククリニック盛岡の2施設で、助成金が受けられるのは京野アトククリニック盛岡です。卵巣凍結は、県内はまだ例がなく、岩手医大と京野アトククリニックの卵巣凍結施設「HOPPE」が協力して行うことになると思います。

Q 治療に関わる入院・通院の期間や費用について教えてください。

A 熊谷氏 方法によって変わります。卵子や受精卵の凍結は、2週間の間に5回程度の受診を目指しています。昨年4月から不妊治療が保険診療になりましたので、費用に関しては個人差がありますが、おおよそ卵子凍結で40〜50万円、受精卵凍結で50〜70万円。それに助成金が入りますので、5割負担ぐらいになると思います。精子凍結は1日で終わり、3万円程度。卵巣凍結は腹腔（ふくろう）鏡手術だと3日程度、費用に関しては今後詳しく決まってくると思います。